

はじめに

リベラル・ナショナリズムという少し風変わりな乗り物に乗って、我々はこれから旅をしたいと思う。その航路には、多くの困難が待ち構えているだろう。我々の目的は、それらの困難の一つひとつを、はたしてこの乗り物で乗り越えることができるのかを確かめることである。そのために、本書では、リベラル・ナショナリズムについて考察している論者だけではなく、一見関係のない文脈で思考している議論であっても、リベラル・ナショナリズムにとって重大な追い風となる、あるいは乱気流を巻き起こすかもしれない議論に、できるだけ幅広く直面することにした。それは、リベラル・ナショナリズムの理論が、今後安全に運行できるのかを考えるためのきっかけになる、いわば水先案内としての試みである。

各章は、それぞれ一つずつリベラル・ナショナリズムが直面する問題群を取り上げるものであるが、第1章から第3章までがリベラル・ナショナリズムの理論的な枠組みを示す、いわば機体の設計図であるのに対し、第4章以降はリベラル・ナショナリズムの立場から、あるいはそれに反対する立場からどのような主張がなされ、リベラル・ナショナリズムがどのようにそれに対応できるのかを示す、飛行計画書としての性格を持っている。

それぞれの章は、基本的に独立した問題を取り上げるものであるが、全体を貫く知的背景や方法の特色も存在し、本書は、主に法哲学や政治理論と呼ばれる分野の文献を参考している。それは基本的に、規範的な理論を扱うものである。抽象的で具体例に欠け、時には現実味のない思考実験も行うだろう。しかし、その動機は、極めてリアルなものである。近代的な国民国家としての日本は、今後どうなってしまうのか。国民国家の統合や運営の望ましいあり方は、時代とともに少しずつ変化してきたし、今後も変化していくだろう。そのときに、日本、あるいはすべての読者の故国が、穏やかに変容することによって、できるだけ長く安定と平和と繁栄を享受できるようにしたい。そのための処方箋として、リベラル・ナショナリズムがどこまで貢献できるかという問題に、挑戦したいのである。このような心構えで、慎重かつ大胆に、旅を進めて

いきたいと思う。

ナショナリズムは、非理性的な排外主義や、人道や人間の尊厳を無視した暴力を掻き立てる悪魔の思想のように言われることもある。確かに、そのような現れ方をするナショナリズムは、歴史上多かったし、現実にも多いし、今後も数多く出現するだろう。しかし他方で、ナショナリズムは、近代的な国家を作り上げ・維持する上で、必要欠くべからざる役割を果たしてきたし、そして今も果たしているし、今後も暫くは果たしていくのではないか。ナショナリズムの前者の側面を十分に銘記しつつ、後者を無視しないというのが、公平な態度であるだろう。

というのも、本書のもう一つの正直な動機は、不当に虐げられた言葉を正当に救済・批評し、あるいは不当に称揚されている言葉を正当に批判・評価することにあるからである。そして、それによって、優等生的な道德主義に満足して思考停止する精神を批判するものである。いかにも教室で教えられたような倫理を後生大事に抱えて、それに快さを覚えて、そこから全く進歩がない精神を批判するものである。言葉が指し示している概念を、できるだけ虚心に理解しようとすることなく、言葉を聞いただけで、脊髓反射的に先入観で善いあるいは悪いと想定することは、学問から最も遠い態度である。

本書の結論は、極めてシンプルで、たった一文で足りる。リベラル・ナショナリズムは、近代的な国民国家を、それがリベラルな方法で統合されるという重大な条件つきで、擁護するものである、というものである。以下では、その内容を、詳しく説明する。

2021年1月吉日

川瀬 貴之